編外

1　出身人物略伝

2　民俗

1　出身人物略伝

選定の基準は、①市域内で生まれ、主として市域外に住んだ、②出生地は市域外であるが、市域内に住んだことがあって、わが町と深い関わりを持って、ともに市域外の広い地域、または国内的、国際的に著名な業績を挙げた、などである。また、すでに本文中で特に取り上げた人物は、重複を避けた。中江種造・京極高光（杞陽）・木下成太郎らである。中島湘煙（岸田俊子）は、前掲①②項ともに該当しないが、特例として最後に添えた。

このうち大部分が廃藩期における元豊岡藩士またはその子弟で、猪子清・止戈之助が上士、和田垣謙三・古島一雄が中士、吉村寅太郎が卒で、残りは下士出身者である。幕末期の下士の年禄は六石二人扶持がほとんど、実収は米約一〇石に過ぎず、生活のためには半士半農的な暮らしを要求されたはずである。卒の年禄は約六石であった。廃藩直前の藩制改革によって上中下士の区別を廃して等級に変え、年俸は一律に十五石としたものの職俸に差をつけたので、上中士にとっては旧禄と変わらぬ不満のないものであったが、下士にとっては一・五倍の増俸となったのも束の間、藩そのものが消えてしまうのである。

豊岡藩下士出身者の多くが政治家・官僚・実業家・学者・教育者・軍人として有数の存在となったが、もし「ご一新」の挙がなく、これらの人物が依然として貧窮の中を厳しい身分制の末端に呻吟しなければならなかったとした場合について考えてみると、その事態を覆した明治維新は正に「下士革命」であった。

配列は没年順。現存者は末尾に配置した。（文中、※印の人名は、本項内に取り上げた人物）

表238　豊岡藩費遊学生徒表　（明治4年11月調による）

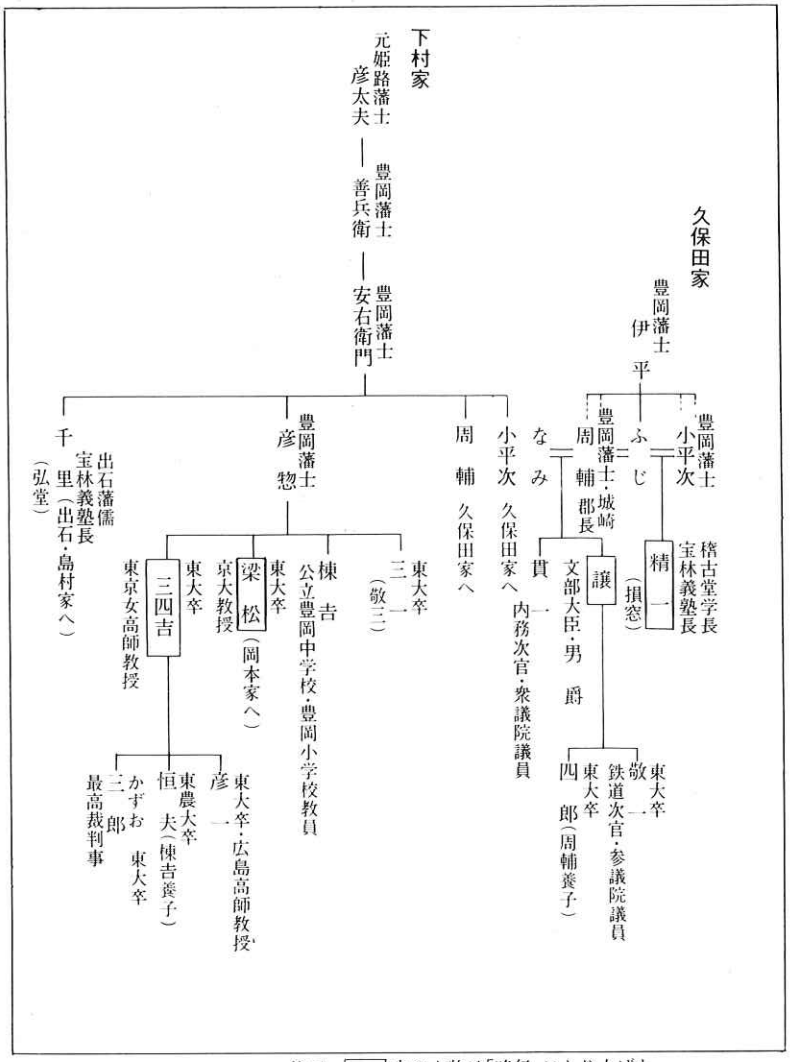
氏　名	父兄名	族	修学地	修学科	修学所	藩　費	修学開始期
浜尾　新		士	東京	仏学	慶応義塾	両　分 6・3	年　月 明治1・6
村尾真一		〃	〃	英学	〃	6・3 （当時はなし）	慶応3・4
小林源八郎	哲	〃	〃	漢学	?	?	明治3・1
神矢粛一(郎)	善之丞	〃	〃	英学	慶応義塾	2・0 （当時は4）	〃
岡　省三	毅(兄)	〃	〃	仏学	〃	4・0 （他に留守分3）	〃
久保田貫一(郎)	周輔	〃	〃	英学	〃	4・0 （他に留守分）	〃
和田　有	節(兄)	〃	西京	漢学	?	4・0	3・2
富永元庵		〃	東京	洋算	?	4・0 （当時はなし）	2・3
尾藤(沖野)忠雄	多	〃	〃	仏学	大学南校	8・0	3・11
岸田泰蔵	丹斎	〃	〃	医学	〃	4・0 （当時はなし）	2　3
吉村寅太郎	八太夫	卒	〃	英学	慶応義塾	6・0 （明治4・10、1年分2石）	2・7

藩費遊学生　明治四年（一八七一）九月、文部省は廃藩によって「折角勉励罷在候生徒空敷（むなしく）為引払候而ハ進歩之妨ニモ相成」ることを恐れ、遊学生を調査し、修学の継続を促した（表238）。

一万五〇〇〇石の豊岡藩としては過分の派遣であったが、藩閥を外れた極小藩の対応として精一杯の思い入れがあったものと思われる。これらの俊秀中から、本項に登場する浜尾新・神矢粛一・久保田貫一・沖野忠雄・吉村寅太郎ら（すべて下士・卒出身）が現れ出た。才能の開花にも経済的裏付けが必要であり、幸運にも、その成果が実った一例を、ここに見てとることができる。

下村家と久保田家　出身人物中、特異なのは下村家と久保田家の家系である。そこには、優生学のテキストにもとり上げ

表239　下村家・久保田家家系



注 1. □内の人物は「略伝」にとり上げた。
2. 久保田家の小平次＝ふじ、周輔＝ふじの関係は推定。
3. ===== は養子関係

写325　晩年の久保田周輔

られる、著名な津山藩の箕作家・菊池家（箕作阮甫・麟祥―菊池大麓―美濃部亮吉）の系譜にも似た、けんらんたる人脈を見てとることができる（表239）。

下村家も久保田家も、ともに豊岡藩下士の身分で、当時は藩は、下士が中士以上と縁組・婚姻を結ぶことを禁じていたから、両家は下士同士の身分として縁組によって結ばれた。下村小平次が久保田伊平の養子として伊平の娘ふじと結婚して精一を生み、小平次の早世によって小平次の弟周輔（写325）がふじに配せられ、ふじの死去によって、周輔は後添えになみをめとり、譲・貫一を生んだものと推定される。したがって、久保田家の血統は精一によってのみ受けつがれたわけである。

彦惣（彦三）の子の三一は東京大学卒業後に夭折、向学心にはやる棟吉が止むなく地元に残って家を維持した。三四吉の子の恒夫を養子としたものの、結局は下村家は豊岡の地を離れることになった。久保田家も周輔の跡を孫の四郎が継いだが、当地を離れた。

周輔の系統は、周輔を含めて官界・政界志向であるのに反し、彦惣のそれは学界・教育界に傾いていることは興味深い。略伝人物の一世代遡るが、周輔・彦惣・千里も、維新前後の豊岡史中で活躍する。開明の世での出世を、子や孫が華やかに担ってくれたことで、せめても髀肉の嘆を柔らげたことであろうか。

久保田　精　一（くぼた・せいいち）

天保十三年（一八四二）一月、豊岡藩士久保田小平治の長男として豊岡に生まれた。字は執中、号は損窓。五歳のとき父小平治が死に、小平治の弟下村周輔が継父となったという。母ふじも没して周輔には後妻が配されて譲※が生まれ、譲は異父弟というより血統的には従弟と推定される（表239）。

文久元年（一八六一）、江戸勤番を命ぜられ安井息軒や大橋訥庵らの門に学んだ。後に藩学稽古堂学長に任ぜられた。稽古堂廃学後、文部省出仕を命ぜられ、中録に進んだが明治十一年退官、芝増上寺内に私塾成蔭舎を開いた。十四年に帰豊して宝林義塾塾長に任じ、公立豊岡中学校幹事を兼ねた。廃塾後は、私邸に成蔭舎を復活した。この間、豊岡県の存置・豊岡始審裁判所の存続など地方問題にも請われて尽力した。

明治二十四年没。四九歳。

写326　猪子　清

猪子　清（いのこ・きよし）

天保四年（一八三三）、豊岡藩重臣猪子正方の二男（長男は早世）に生まれた。幼名謙三郎、長じて左家太、後に清・一新、さらに改めて一清と名乗った。大坂の儒学者藤澤東畡に学んだ。慶応四年（一八六八）四月、御側年寄役に、翌明治二年十一月三八歳のとき

豊岡藩大参事（版籍奉還以前の筆頭家老に当たる）に進んだ。四年七月には藩は県と改称され、その豊岡県が十一月に廃県となると翌五年には上京し太政官に出仕、十八年に「法制局七等出仕」を辞して京都在住の長男止戈之助（※しか）宅に隠居した。二十七年四月没、六二歳であった。

『豊岡誌』によると、少壮にして豊岡藩用人に抜擢され、安政の始めに文武方・稽古堂学長を兼ね、維新に際しては時に藩論沸騰することはあったが、よくこれを統一して進退をあやまらず、大参事に任じられるや心を用いて後進を育成し、文武を尊び弊習を一掃して綱紀を整え、藩の気風を高揚したという。明治期に旧豊岡藩士から浜尾新（※）・久保田譲（※）を始め、多くの人物を輩出した背後には猪子清があったといわれる。

塩井雨江（しおい・うこう）

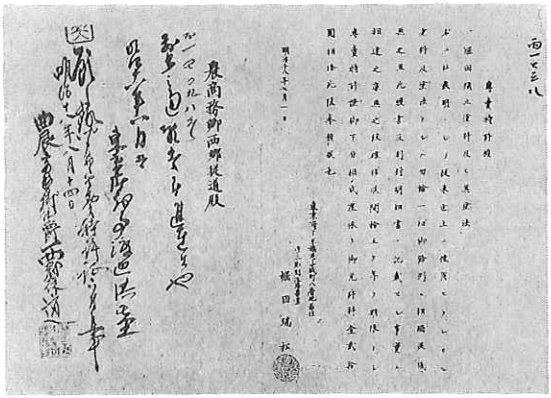
明治二年（一八六七）一月三日、豊岡藩士塩井鍵の子として豊岡小田井町に生まれた。名は正男。別号釣士（ちょうし）。東京帝大文科大学在学中に文芸雑誌『山桜』を創刊した。卒業後、中学・日本女子大・奈良女子高等師範などで教えた。新体詩・短歌・美文小説にすぐれ、大学二年生のときに翻訳したスコット『湖上の美人』で有名になった。落合直文の短歌結社「あさ香」社に参加、国文学者としては『新古今集詳解』の大業がある。妹は大町桂月夫人。

大正二年、四四歳で没した。大町桂月編『雨江全集』がある。

堀田瑞松（ほった・ずいしょう）

天保八年（一八三七）四月十二日、豊岡新町の刀鞘塗師利三郎の長男として生まれた。生家は安楽寺横であった。父の死後、十七歳で家業を継ぎ、二二歳のとき京都に出て家業のかたわら彫刻・唐木細工業を開き、鉄筆一刀彫を始めた。二九歳のとき御物彫刻の命を受け、孝明天皇から「瑞」の一字を賜って瑞松と称したという。

写327　堀田瑞松



写328　堀田瑞松の専売特許願と許可証（第一号）

明治十一年東京へ移り、十八年八月十四日付で「堀田さび止塗料及其塗法」で専売特許第一号を得た。二十三年七月には、防介藻塗料を発明して特許第九一八号を得ている。

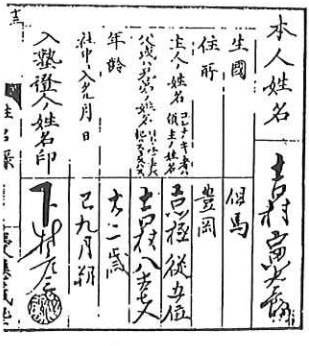
大正五年九月没。七九歳。

吉　村　寅太郎（よしむら・とらたろう）

嘉永元年（一八四八）、豊岡藩足軽（藩制後は卒と呼んだ）の子として生まれた。土佐の維新の志士・同名吉村寅太郎の一〇歳下、後に遊学の途をともにした浜尾新※の一歳上である。

写329　晩年の吉村寅太郎
（和田英作画）

写330　浜　尾　新
慶應義塾入門姓名録
（明治２年）



写331　吉　村　寅太郎
慶應義塾入門姓名録
（明治２年）

明治元年京都に遊学、大坂の洋学塾に移り、二年には浜尾新らと蒸気船で上京した。船賃は太政官札で十五両。横浜に上陸したものの居留地の設置当初で宿泊を許されず、徒歩で東京へ向かい、九月に浜尾と慶応義塾に入塾した。証人下村彦三（彦惣）は豊岡藩士で、岡本梁松※・下村三四吉※兄弟の父である。浜尾は後に、陸軍に入るためにフランス語を学ぶ目的で村上英俊塾に転じた。翌三年には、寅太郎は義塾の教師になって給料を得た。

六年には、塾では食えないというので文部省に出仕することにした。福沢諭吉に強く引き留められたが従わなかった。当時、すでに両親を引きとり、五〇〇円で家を買いとっていた。広島外国語学校長・文部省視学官の後、二十年四月に三一歳で第二高等中学校（二高。仙台）初代校長となり、後、三十五年からは第四高等学校（四高。金沢）第六代校長に転じ一〇年間奉職した。二高時代の生徒に高山樗牛・土井晩翠・井上準之助などがあり、学制改革で高浜虚子・河東碧梧洞などの三高生を編入した。大正六年一月没。六八歳。

写332　神矢粛一（壮年期）

神谷粛一（かみや・しゅくいち）

嘉永二年（一八四九）三月、豊岡藩士沖野喜右衛門の次男として豊岡に生まれ、同藩士神矢善之丞の養子となった。沖野忠雄※は弟、森垣※亀一郎は女婿である。

明治初年に上京して安井息軒に学び、明治三年一月からは藩遊学生として慶応義塾を経て明治八年東京師範学校を卒業した。十年豊岡師

写333　和田垣　謙　三

範学校長・十一年神戸師範学校長・十二年豊岡小学校初代校長となった。二十四年以降、神戸で小学校校長を勤め、辞職後は上京して済美塾を創立した。この間、三十六年私立神戸教育会を設立、学童の水泳指導に尽くした。豊岡小学校時代、始めて児童に水泳をさせ、神戸でも小学生の海臨水泳訓練の嚆矢をなし、心身の鍛錬の気風の養成に努めた。豊岡小学校本館前に胸像がある。

大正八年（一九一九）一月五日、済美塾で没した。七〇歳。

和田垣　謙　三（わだがき・けんぞう）

万延元年（一八六〇）六月、豊岡藩士和田垣譲の二男として豊岡に生まれた。

明治五年に帰省した浜尾新に連れられて猪子止戈之助・河本重次郎とともに上京、進文舎に入ってドイツ語を学んだが、森鴎外とは同窓であった。六年に外国語学校に入学、明治十三年大学南校（現東大）を卒業、わが国文学士第一号となった。同年英国のケンブリッヂ大学・ドイツのベルリン大学に留学、十七年帰朝して東京帝大法科大学教授を命ぜられ、農科大学教授を兼ねた。二十一年には東京商業学校長を嘱託された。

謙三は奇行でも知られ、金銭に淡白で豪放磊落、「親分的博士」と呼ばれた。著書に『兎糞録』『世界商業史要』の他、五〇数版を重ねたという英和・和英辞書などがある。

大正八年七月十八日没。六〇歳。

沖野忠雄（おきの・ただお）

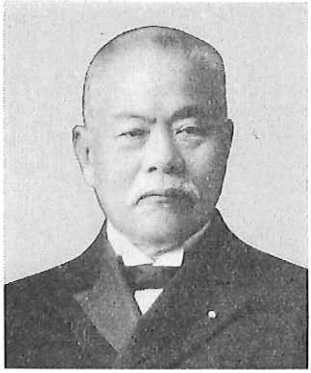
豊岡藩士沖野喜右衛門の三男として安政二年（一八五五）、大磯村に生まれた。幼名は松之助。長兄勝蔵は廃藩のとき旧藩の会計処理上の責任を負って明治五年一月に切腹した。次兄粛一※はすでに同藩士神矢家に養子として入っており、忠雄もまた尾藤家に入籍、明治三年十一月から藩貢進生として大学南校（東大の前身）に学んでいたが、勝蔵の死によって復籍した。妻は猪子清※の娘フデ。

明治八年にフランスに留学、十三年帰朝して高等工業学校（現東工大）講師となり、次いで内務省土木局技師に任じ工学博士号を受けた。四十四年内務技監として全国の土木工事事業を監督することになったが、この間、大阪及び神戸築港・淀川改修に当たり、「土木の神様」と呼ばれた。昭和三十四年、有志によって出石神社境内に巨大な顕彰碑が建立されたが、出石神社の祭神・天日槍（あめのひぼこ）が豊岡盆地の悪水を抜いて平地化したといわれる伝承から土木関係者の崇敬を受けていることに因んでいる。

写334　沖野忠雄

忠雄が郷土円山川の改修には必ずしも積極的な対応を示さなかったのは、「大磯の大曲がり」と呼ばれる洪水頻繁で後の改修の最重要点となった立地の大磯村に幼少時を過した体験から、郷党の改修に対する強い要望は充分に理解しながら、それだけに全国に数多い各地の暴れ川を前にして、私情にのみかかわることはできないという高潔な人格によるといわれる。大正十三年三月二十六日没。淀川毛馬閘門河岸に胸像がある。

浜尾　新（はまお・あらた）



写335　浜尾　新

嘉永二年（一八四八）四月二十日、豊岡藩士浜尾嘉平次の長男として江戸藩邸で生まれた。幼名は貞次郎。文久三年（一八六三）帰豊、洋式練兵隊長に任ぜられ、慶応三年（一八六八）六月には藩費遊学生として再び東京に戻った。明治二年から慶応義塾・村上英俊塾・大学南校（現東大）に学び、卒業後、共慣義塾を開いたが明治五年文部省出仕、大学南校生徒舎監事となる。後に二度にわたって東京帝大総長を勤め「東大育ての親」と呼ばれるに至った。

六年に米国に留学、七年帰朝して、やはり東大の前身となる開成学校監事となった。十年に東京大学予備門主幹・十四年専門学務局長・十六年文部大書記となり東京大学綜理補を兼ねた。十八年英国ケンブリッヂ大学に学び、二十年東京美術学校（現東京芸大）を創設して学校長事務取扱い、二十二年元老院議官・二十三年貴族院議員・二十六年加藤弘之の跡を受けて東京帝大総長・三十年文部大臣となる。再び東京帝大総長となって、四十年に男爵を授けられ、四十四年枢密顧問官に任ぜられた。大正三年東宮大夫を兼ね、東宮御学問所開設にともない副総裁となった。後、子爵・枢密院議長・従一位勲一等・内大臣、とまさに位人臣を極めた。大正十四年九月二十五日、火傷を負って七六歳で没した。養子四郎は加藤弘之の孫。東京大学構内に全身銅像がある。

西村輔三（にしむら・すけぞう）

安政元年（一八五四）三月十日、今森村に安平の子として生まれた。藩校稽古堂は庶民の子にも開かれていて、輔三はここに学んでその勉強ぶりを注目された。明治三年藩命によって公議人として上京する藩士岩崎豊に随伴、七年には商事研究で渡米する岩崎に従って三年間滞米、貿易業務を研究した。

帰国後、横浜の米人歯科医パーキンスの歯科診療所に通訳兼助手として雇われ、この間に歯科医学を学んで明治十二年、歯科医術開業試験に合格した。

十四年パーキンスの帰米により、輔三は東京市京橋区に歯科診療所を独立開業したが、その貿易業務の手腕に注目した五代友厚の要請で診療所を大阪市に移し、歯科診療とともに貿易事業にも従事した。二十四年には大阪市議会議員となり、大阪市の伝染病予防対策に貢献した。その後、三十六年には日本歯科医師会会長に推された。昭和七年二月二十四日に没した。

写336　森垣亀一郎

森垣亀一郎（もりがき・かめいちろう）

明治七年（一八七四）三月二十二日、豊岡町小尾崎に森垣新治郎の次男として生まれた。明治十三年豊岡小学校に入学、古島一雄※は当時の友人であったし、後に岳父となる神矢粛一※が校長であった。

神矢は亀一郎の将来に嘱望して郷土の代議士冨田仙助の世話を受けさせた。養源寺境内にある冨田仙助記念碑は、冨田の恩に報いて亀一

郎が建立したものである。

東京府立尋常中学校（後の一中。現日比谷高校）・一高を経て明治三十一年に東京帝国大学を卒業した。大阪市築港事務所技師・大蔵省技師の後、大正十二年神戸市技師長となり神戸築港修築に力をつくした。この間、沖野忠雄※の指導と推輓を受けた。昭和九年一月二十三日没。

写337　久保田　譲

久保田　譲（くぼた・ゆずる）

弘化四年（一八四七）、豊岡藩士久保田周輔の長男として豊岡に生まれた。旧名は譲二郎、譲之助。精一※は異父兄、鳥取県知事・内務次官であった貫一は弟で、鉄道次官となった敬一は長男。生家（京町）は現在、豊岡小学校校長住宅や城崎郡・豊岡市教育会館となっていて、昭和七年に久保田四郎・譲・貫一の三氏から豊岡町に寄付されたものである。慶応義塾を卒えて明治五年、文部省に出仕、七年広島師範学校（現広島大学）校長、文部省会計局長・普通学務局長を経て、二十五年文部次官。二十七年貴族院議員、三十八年文部大臣に任じた。男爵・枢密顧問官。昭和十一年四月十四日没。八九歳。

神月徹宗（こうづき・てっしゅう）

明治十二年（一八七九）三月二日、祥雲寺村田中藤右衛門の三男に生まれた。幼名は虎吉。十八年、京都府

熊野郡久美谷村神谷（現久美浜町神谷）臨済宗宝林寺に入り住職神月文猷の養子徒弟となり、僧名を智性・道号を徹宗とした。三十一年文猷死去の後、同じ神谷の同派宗雲寺元徹和尚に、さらに大徳寺派管長見性宗般に師事した。

写339　神月徹宗

写338　河本重次郎

三十七年宝林寺住職・大正七年妙心寺派専門道場円福寺住職・十二年より臨済宗大学学長・昭和三年妙心寺派管長に任じた。七年管長を辞し、円福寺に再住。

昭和十二年十月六日、高知県の遊説先で没した。五九歳。『徹宗和尚全集』がある。

河本重次郎（こうもと・じゅうじろう）

安政六年（一八五九）八月十五日、豊岡藩士河本斉助の長男として豊岡に生まれた。斉助の末弟が同じ豊岡藩士中江家に養子となった中江種造である。明治五年、帰省していた浜尾新に連れられて猪子止戈之助・和田垣謙三とともに上京、叔父中江の横浜の家に入った。

東京外国語学校を経て明治八年、東京医学校（東大の前身）に入り、十六年東大医学部を首席で卒業した。北里柴三郎は同級生であった。十八年、ドイツ及びオーストリヤに留学、眼科を専攻した。二十二年

写340　下　村　三四吉

帰朝、東京帝大医科大学に眼科学教室を創設、長年にわたってわが国眼科学界の重鎮であった。妻香芽子は加藤弘之の弟正矩の養女。弟清もまた、眼科医となった。昭和十三年四月四日没した。八〇歳。

下　村　三四吉（しもむら・みよきち）

明治元年（一八六八）四月十七日、豊岡藩士下村彦惣の四男として豊岡に生まれた。※岡本梁松は兄に当たる。宝林義塾・東京高等師範学校卒業後、山梨県中学校教諭となり、さらに東京帝大を出て東京女子高等師範学校教授となった。

昭和十三年十二月八日没。三男三郎（かずお）は最高裁判事になった。

図22　力餅連合会商標

池　口　力　蔵（いけぐち・りきぞう）

文久元年（一八六一）四月十七日、目坂村の小農の長男に生まれた。十二歳で豊岡藩士伊藤家の下男となり、三年後には帰郷して農業を継いだ。明治二十二年（一八八九）三月、再び豊岡町に出て豊田町で饅頭屋を開いたが、数年後に閉店。発奮して京都に出、寺町六角（現・中京区寺町六角下ル）に饅頭店を開店した。日清戦争のころ「勝利饅頭」と名付けて売り出したが、成績は芳しくなく、借入金で店舗を改造するとともに餅に鞍

替えして、自分の名を一字入れて「京都名物力餅」と銘打って売り出した。ときに明治三十六年三月。「力持ち」に通じる「力餅」の名と、翌年勃発した日露戦争で人気は上昇、京都名物として評判を得るに至った。

大衆食堂として「力餅食堂」の経営も始めたが、これも人気を博し、親戚や徒弟にも「のれん分け」して、「力餅」の名と「のれん」は関西・中国・山陰に広まり、現在の組合員は一六〇人に及ぶという。

昭和十六年六月十九日没。(『力餅組合連合会員名簿』から)

一瀬粂吉（いちのせ・くめきち）

明治二年（一八六九）十月二十八日、出石藩士磯野員豊の弟として生まれ、幼くして元豊岡藩士一瀬熊吉の養子となった。二十二年東京高等商業学校（現一橋大）付属主計専修科を卒業、文部省会計局に入ったが、三十二年三十四銀行に移り、大正十四年副頭取に進んだ。昭和八年、合併によって成立した三和銀行取締・三融証券代表となった。

写341　一瀬粂吉

豊岡商工実修学校の本校舎建設費の一部を寄付するなどの他、豊岡町に寄与するところが大きかった。

昭和十八年一月十九日没。

秦慧昭（はた・えしょう）

文久二年（一八六二）三月四日、武蔵国橘樹郡小机村（現横浜市）

写343　秦　慧昭

写342　猪　子　止戈之助

亀井兵助の次男に生まれた。六歳のとき仏門に入り、品川の曹洞宗天竜寺秦慧芳の弟子となった。明治三年（一八七〇）慧芳の下鶴井村長松寺への転住に従った。二十一年神戸連芳学林助教授となり、二十三年春に慧芳隠退にともない長松寺住職となり、二十四年十一月総持寺（能登）後堂に就任、大正三年永平寺後堂に就任した。六年宮津智源寺・九年神戸福昌寺に晋山、昭和八年十二月永平寺貫首となった。

昭和十九年一月十九日没した。八三歳。長松寺に納骨。

猪　子　止戈之助（いのこ・しかのすけ）

万延元年（一八六〇）四月四日、豊岡藩士猪※子清の長男として豊岡で生まれた。明治七年（一八七四）十一月、大学東校（後の東京大学医学部）に入学、十五年に卒業とともに京都府立医学校（現京都府立医科大学）教諭・十六年一月に副校長・二十年一月に校長となった。同年京都府下開業医師と図って京都医学会を設立、また京都私立独逸学校の創立に関与し、十七年四月開校と同時に名誉校長を兼ねた。二十一年には京都療病院でわが国最初の喉頭ガン手術を行なって成功した。二十四年五月、いわゆる大津事件でロシヤ皇太子の負傷に際し、宮内庁の命に応じて救急措置を講じた。同年十月の濃尾大地震には日赤京都支部嘱託として大垣市に出張、救療活動を行

なった。二十五年には留学中に病没した実弟吉人の遺骨受取りのこともあってドイツに遊学。三十二年七月、京都帝国大学医科大学創設に当たって同大学外科学担当教授兼同大学付属医院院長。同時に医学博士の称号を与えられた。風格識見高く、内臓外科では医学徒から「先生の指先には目がある」といわれるほど非凡の力量を発揮した。大正十年一月退官、京都帝国大学名誉教授。

昭和十九年一月三十日没。八五歳。

岡本梁松（おかもと・やなまつ）

文久三年（一八六三）五月十八日、豊岡藩士下村彦惣の三男として豊岡に生まれた。※下村三四吉は弟である。奈佐谷吉井村から明治六年ころ豊岡・豊田町に出た医師岡本文吾の養子となって、明治二十二年東京帝大を卒業、二十四年助教授となり、三十二年法医学研究のため欧州に留学。帰朝後、京都帝大教授となり、四十年に法医学講座を設置して担任した。昭和二十年一月十一日没。

写344　岡本梁松

大橋光吉（おおはし・こうきち）

明治八年（一八七五）八月二十六日、高屋村森垣治右衛門の四男として生まれた。上京して博文館に入社、館主大橋佐平に認められて佐平の三女幸子と結婚、三十二年五月大橋姓を冒した。

三十九年、絵はがき製造販売の精美堂を創設、大正十四年博文館印

写346　大橋光吉の胸像

写345　木　村　　発（肖像画）

刷所と合併して共同印刷を設立して、その社長になった。日本書籍の社長も勤め、出版・印刷界の重鎮であった。

昭和七年七月、故郷の五荘村に一万円を寄付、五荘小学校体育館や高屋公会堂の建設に寄与した。五荘小学校に胸像、高屋公会堂に顕彰碑がある。昭和二十一年七月三日没。

木　村　　発（きむら・はじめ）

万延元年（一八六〇）、二万郡七釜（現浜坂町）の丸毛精次郎の三男に生まれた。字は子美、号は暢斎。長じて朝来郡梁瀬（現山東町）の叔父木村庄左衛門の養子となったが、のち同町内に別家した。

東京に遊学、三島中州（二松学舎教授）に学んだ。このとき病患のため聴覚を失うが、障害に屈することなく学問に精励し、多くの業績を残した。

梁瀬の住宅を「行餘学文草堂」と名づけていたが、ここには藤沢南岳（大阪の儒学者）・中村確堂（近江の儒学者）・桜井勉（出石出身。『校補但馬考』の著者）・近藤英也（豊岡中学校校長）ら多くの文人墨客が訪れた。そのひとりに一〇歳年下の伊地智三郎右衛門がいて、終世師弟の交りをつづけた。伊地智が豊岡町長に就任（大正十三年十二月）後、招じられて豊岡に転住し、以来『三江誌』

『豊岡誌』『乙丑震災誌』『円山川改修沿革誌』『京極家家譜』『朝来誌』『竹田誌』などの郷土史を著した他、詩文をつくり、請われて多くの碑文や墨蹟を残している。特に『豊岡誌』四巻（昭和十七年。豊岡町）は不朽の光彩を放っている。

昭和二十一年三月二十六日没。

若宮貞夫（わかみや・さだお）

明治八年（一八七五）一月五日、滋茂の光行寺寺中西楽寺住職若宮正海の三男として生まれた。幼時から兄正音（工部省・逓信省から農商務省に転じ商工局長。退官後、東京精米・深川倉庫各株式会社社長。三十二年、末弟貞夫を養子とする）に養われ、東京本郷小学校・開成中学校・二高を経て東京帝大に進んだ。三十二年逓信省に入り、大正十一年逓信次官に任じた。十三年、兵庫県第五区選出の衆議院議員に当選、政友会に属し昭和六年犬養内閣で陸軍政務次官になった。七年以降、立憲政友会の幹事長に就任、後に政務調査会長・総務会長を勤めた。

写347　若宮貞夫

戦前、同じ五区選出で対立党の憲政会・斉藤隆夫が粛軍演説で衆議院から除名されたとき、党派的立場を超えて同情し、自らも辞任して五区補欠選挙の条件を作り、斉藤の再選を意図したといわれる。いわゆる翼賛選挙のときは、反戦の立場から非推選で立候補して落選した。

元厚生大臣橋本竜伍は女婿、現運輸大臣橋本竜太郎は孫になる。西

楽寺前に胸像がある。

昭和二十一年九月八日、香住町で没。

古島一雄（こじま・かずお）

慶応元年（一八六五）八月一日、豊岡藩士古島玄三の長男として豊岡に生まれた。祖父良平は、生野事件で豊岡藩に逮捕された平野国臣らを藩命で、その家に禁固したが、国臣らの志を汲んで丁重に扱ったと伝える。

写348　古島一雄

明治十二年（一八七九）上京、同郷の浜尾新※の家に寄宿したが、粗暴な振舞いが多く、手を焼いた浜尾は杉浦重剛に一雄の教育を託した。明治十四年、一たん帰郷して宝林義塾に学び、豊岡小学校の代用教員や松江の裁判所員を勤めた。後に再び上京、同郷の和田垣謙三※の世話になった。

二十一年、杉浦の紹介で反欧化主義雑誌『日本人』に入社、次いで『日本』の前身である『東京電報』に新聞記者として送りこまれた。三十一年『九州日報』主筆となり、四十一年『万朝報』に入社した。

四十四年、東京市から立候補して国民党の代議士となり、当選六回、昭和七年に貴族院議員に勅選された。この間、大正十三年逓信政務次官となった。戦後、公職追放された鳩山一郎の後任として自由党総裁に推されたが、代わって吉田茂を推し、その政治指南役と呼ばれた。「忠臣」浜尾新の人格に敬服しつつも、その政治的見識にはついに同調できなかったという野人ぶりがうかがわれる。昭和二十七年五月没。八七歳。

竹中政一（たけなか・まさいち）

明治十六年（一八八三）十月十一日、竹中作平の長男として駄坂村に生まれた。中谷尋常小学校・豊岡高等小学校・豊岡中学校を経て四十年に神戸高等商業学校を出、南満州鉄道株式会社に入った。大正十一年満鉄参事・昭和六年満鉄理事に就任。

昭和十年退社後、満州重工業理事・満州瓦斯社長など現地実業界にあって経営の才腕を揮った。

新田小学校の奉安殿・竹中文庫・竹中奨学金、豊岡中学校の竹中賞など郷土愛にもとづく各種の寄金を続けた。

昭和二十五年十月二十七日没した。六七歳。

写350　竹中政一

写349　紫安新九郎の胸像

紫安新九郎（むらやす・しんくろう）

明治六年（一八七三）八月十七日、野上村西垣仁右衛門の次男に生まれた。幼時、養源寺に入り、住職紫安師との縁で紫安を名乗るに至った。三十三年東京法律専門学校（現早稲田大）を卒え、後に博文館・鎮西日報・万朝報を経て大阪市南区区長となり、四十五年衆議院議員となった。当選一〇回、拓務政務次官を勤めた。

昭和二十七年、大阪で没した。野上に頌徳碑と胸像がある。

写352　日下義禅

写351　舟越楫四郎

日下　義禅（くさか・ぎぜん）

明治十五年（一八八二）一月十七日、山本村中田茂右衛門の次男に生まれた。本名は常吉。二十六年京都府熊野郡海部村海士（現久美浜町海士）宝珠寺に入り、日下義定を師として得度。四十三年真言宗高野山大学卒業、大正五年大阪市了徳院住職を経て昭和十八年真言宗東寺派管長に就任した。

昭和三十一年二月一日没す。七五歳。

舟越　楫四郎（ふなごし・かじしろう）

明治三年（一八七〇）八月、豊岡藩士舟越恭の四男として南谷（現豊岡高校校地）に生まれた。前名は済吉。二十三年に海軍兵学校卒業。大佐のころ艦長として韓国皇太子李世嗣陪乗艦を津居山港外に碇泊させたことがある。日露戦争では連合艦隊司令長官東郷平八郎大将の幕僚として、日本海大海戦に参加したことは知られている。練習艦隊司令官・横須賀鎮守府工廠長を歴任。海軍中将・帝国飛行協会理事・三菱石油社長・三菱航空機会長。

昭和三十二年、八七歳で没した。

赤木正雄（あかぎ・まさお）

明治二十年（一八八七）三月十四日、引野村赤木甚太夫の次男として生まれた。四十一年、県立豊岡中学校（六期生）から一高に進み、ときの校長新渡戸稲造博士の訓話に感じて治水事業を志し、東京帝大卒業後、大正三年内務省に入った。〝砂防〟にかけた一生の始まりである。滋賀県瀬田川支流を手始めに吉野川・淀川・立山山系・飛騨山系・六甲山系など、自ら主任として指揮した砂防工事の足跡は全国に及び、この間にはウィーン農科大学に学び、京都帝大・日本大学では教鞭をとっている。

昭和十七年退官して、二十一年貴族院議員となり、翌二十二年には参議院議員に当選、建設政務次官などを歴任、三十二年落選後は砂防会館を拠点に全国治水砂防協会専務理事として活躍した。

四十六年六月豊岡市名誉市民に推され、同年十一月には文化勲章を授与された。

四十七年九月没。八五歳。引野の生家に近く「生誕の地」碑が、円山大橋西端には銅像が立っている。甥の須留喜は都立大教授で、都政研究の権威といわれる。

写353　赤木正雄の銅像

小場瀬　卓　三（おばせ・たくぞう）

明治三十九年（一九〇六）五月十二日、中町に生まれた。生家は呉服商。祖父の小場瀬文錦は冨岡鉄斉に認められた文人で、山水画をよくした。豊岡中学・甲南高校を経て東京帝大でフランス文学を専攻。昭和十一年からフランス政府招聘留学生としてソルボンヌ大学に学ん

写355　小場瀬　卓　三

だ。戦後、東京工大・東京商科大で教鞭をとり、二十四年都立大学に招かれフランス文学を担当した。モリエールやディドロの研究者として著名。日本フランス文学会会長。

『フランス古典喜劇成立史』『先駆者たち―ディドロと百科全書』などの著書がある。戦後のフランス文学興隆の担い手の一人として幅広いファンを獲得した。

昭和五十二年十一月十二日没。

写354　藤　井　重　夫（22歳）

藤　井　重　夫（ふじい・しげお）

大正五年（一九一六）二月九日、小田井で生まれた。生家は「はんだにや」。豊岡小学校・豊岡商工実修学校（現豊岡実高）出身。昭和十六年から三十八年まで朝日新聞社社員。以後、文筆生活に入る。二十六年、小説「佳人」が芥川賞候補作となり、後に日活で映画化された。四十年、小説「虹」で第五十三回直木賞を受けた。

主著に『風紋』『家門の果て』『終りなき鎮魂歌』『死線』『悲風ビルマ戦線』などがある。

昭和五十四年一月没。

木下　保（きのした・たもつ）

明治三十六年（一九〇三）十月十四日、新町に生まれた。県立豊岡中学校を経て東京上野の音楽学校（現東京芸大）声楽科を卒業、終戦まで母校で教鞭をとった。この間、昭和七年から十年までドイツに留学。二十六年から広島大学、二十八年からは東京学芸大学でも教えた。

戦後は藤原歌劇団などで活躍、藤原義江とならぶ声楽界の大御所でもあり、優れた指揮者でもあった。豊岡市歌・豊岡高校校歌の作曲を手がけている。昭和五十七年十一月十一日没。

写357　木下　保

写356　秦　慧玉

秦　慧玉（はた・えぎょく）

明治二十九年（一八九六）三月二十五日、神戸市虎谷家の出身。五歳で長松寺に入り慧※昭禅師の薫陶を受けた。曹洞宗大学・東北帝大を卒業、大正十二年には東京帝大に在学した。浦和高校・駒沢大学教授・永平寺立青葉学園園長を経て永平寺後堂、田中寺・長松寺・中央寺各住職の後、昭和五十一年四月永平寺七十六世貫首・曹洞宗管長に就任した。県立豊岡中学校十五期生。昭和六十年一月二日没。八九歳。

写359　大　江　保　直

写358　杢　田　たけを

大　江　保　直（おおえ・やすなお）

明治三十年（一八九七）十一月二十日、田鶴野村野上の北村安右衛門の次男として生まれ、母方の祖父・五荘村高屋の大江仁寿（仁兵衛）の養子となった。

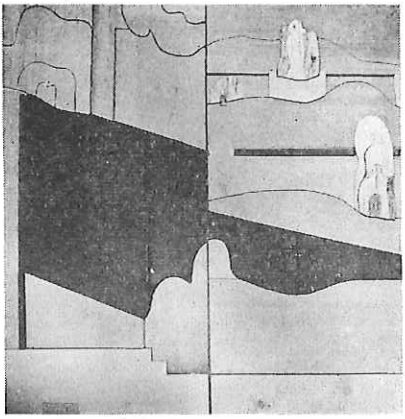
県立豊岡中学校・八高を経て大正十年、東京帝大を卒業。裁判官となり、昭和十二年東京控訴院判事、後に大阪控訴院部長・陸軍司政長官となった。三十五年三月、高松高裁長官に任じ、退官後は独協大学教授となった。昭和六十一年五月一日没。八八歳。

杢　田　たけを（もくた）

明治四十三年（一九一〇）二月二十五日、京口に生まれた。祖父は僧侶で日本画を描き、画家への志望は祖父によって啓発された。父の鍛冶工場を継いで、昭和二十八年東京都練馬区の現住地に移るまで自ら鍛冶業を営んだ。

昭和三年、日本美術院小泉勝爾に日本画を学び、二年後に洋画に転向、十一年第五回独立展に初入選、須田国太郎に師事した。二十二年独立賞を受け、二十四年には独立美術協会会員に推挙された。初期の作品は詩情あふれるメルヘン風の具象的作風を示していたが、上京後は木・鉄片を用いた抽象的なコラージュ作品に転換

した。独立展初入選の「鉄屑のある風景」自体が鉄片をコラージュした油彩であることを考えると、この転換は原点への回帰とも見られる。文化庁・東京都国立近代美術館などに作品が収蔵されている他、豊岡市市民会館文化ホール二階ロビーにはコラージュ作品が壁面を飾っている。



写361　杢田たけをの作品
「御阿礼」（木・鉄）

加　藤　美代三（かとう・みよぞう）

明治四十五年（一九一二）一月二十五日、小田井に生まれた。大正十三年豊岡小学校卒業後、京都市立美術工芸学校に入り、同市立絵画専門学校（現京都芸大）に進んだ。その後、京都嵯峨に居を定め、西山翠嶂らに師事、現在は日展会友、朴土グループに所属。

官展には母校在学中に初入選、以来帝展・文展・日展を通じて入選を続け、昭和二十六年白寿賞受賞・翌二十七年特選・二十八年無鑑査となった。

最近、城崎町極楽寺の水墨襖絵（ふすまえ）・当市養源寺新築山門天井画（写364）などに健筆を揮っている。

写360　加　藤　美代三

森田子龍（もりた・しりゅう）

明治四十五年（一九一二）六月、森田松蔵の次男として五荘村上陰に生まれた。名は清。五荘小学校から県立豊岡

写362　森田子龍の作品
「舞（まう）」(1973)

写363　森　田　子　龍

写364　加藤美代三画・養源寺山門天井画

中学校に進み、昭和五年卒業とともに豊岡中学校書記に就職、校長近藤英也の転勤にともない二年後に神戸三中に移った。昭和十二年上京して上田桑鳩の書道芸術社に入り、書家比田井天来に認められた。十三年には大日本書道院展で金賞、次いで日満支書道展で文部大臣賞を受けた。十九年郷里に疎開、豊岡高女及び豊岡工業学校（現豊岡実高）の書道講師を勤めるかたわら書道塾を経営、二十三年書道誌『書の美』を発刊した。二十五年京都に出て、墨人会を結成、いわゆる前衛書道の道を歩んだ。『墨人』『墨美』を創刊、その作品と理論は国際的に注目され、二十八年パリに出展した「無量寿」は絶賛を浴びた。以後、外国への出展が続いて声価を確立、京都市文化功労者表彰・京都新聞文化賞を受けた。

岸田俊子（きしだ・としこ。中島湘煙）

文久三年（一八六四）～明治三十四年（一九〇一）。

最初の女性民権家として名を馳せ、転じて婦人評論・小説等に筆を振い、文筆家としても名をなした。

父は茂兵衛といい、但馬豊岡・宵田町の呉服商・小松屋岸田小右衛門の息。母はタカといい、同じく宵田町の醸造業・河守屋久兵衛の四女であった。タカは竹香と号し、学識豊かな女性であったという。

父茂兵衛は、その兄清八郎（幼名武造、長じて小三郎、のち清八郎と改名）とともに、それまで帰依していた曹洞宗より法華宗に改宗、そのため兄弟とも獄門につながれること三五日（いわゆる「小松屋事件」）、茂兵衛は豊岡を追放され、いったん出石に行って、京都に出た。

俊子は茂兵衛・タカ夫妻の長女として、文久三年十二月五日（陽暦では一八六四年一月十三日）、京都に生

写365　宮中装束の岸田俊子

まれた。家業は古着商（のち呉服屋、ついで質商に転じた）。幼いころより、その俊秀ぶりをうたわれ、ために時の京都府参事（のち知事となる）植村正直より、俊の字をもらったという。

明治十二年（一八七九）、山岡鉄舟・植村正直の推挙により、文事御用掛として宮中に出仕（十五等出仕）、皇后に『孟子』などの講義をした。二年後、病気を理由に宮中を辞して母とともに旅に出た。東海道・中国地方から九州・四国に及ぶ大旅行で、その折、当時自由民権の声でわき立つ土佐の立志社に立ち寄った。かの地での体験が俊子を女流民権家の道に進ませたのであった。

翌明治十五年（一八八二）四月一日、大阪・道頓堀で最初の演説「婦女の道」を行ない、大評判となった。以後、関西はもとより岡山・徳島・熊本等に遊説活動をくり広げ、女権の主張を大いに鼓吹した。

明治十六年（一八八三）十月、女弟子たちを率いて滋賀・大津で行なった演説「函入娘（はこいりむすめ）」が集会条例違反のかどで拘引され、八日間の獄中生活を送った。獄中で著わした『獄ノ奇談』の一節に、次のような詩がある。

「仮令（たとえ）　吾　蠖（かく）（尺取り虫）の如く身を曲ぐるとも　胸間　何ぞ屈せむ此の精神を　雨声　是れ母親の涙ならざらむや　情は殺す獄中　寐（い）ねられざる人を」。もって当年の意気知るべしである。

明治十七年（一八八四）、東京に上り、同年五月、女性によって最初に書かれた女権論「同胞姉妹に告ぐ」を自由党機関誌『自由の燈』に発表、「嗚呼、世の男らよ。汝等は口を開きぬれば改進と云ひ改革と云ふにあらずや。何とて独りこの同権の一点においては旧慣の慕ひぬるや俗流のままに従ひぬるや。我が親しく愛しき姉よ妹よ。旧弊を改め習慣を破りて彼の心なき男らの迷ひの夢を打破り玉へや」と気を吐いた。この年、中島信行と結婚し、中島家へ入った。中島信行は土佐の出身で、弘化三年（一八四六）生まれ、維新の功労者であった。明治十三年（一八八〇）、元老院議官をやめ、民権運動に身を投じ、翌十四年（一八八一）自由党創立とともに副総理となった（総理は板垣退助）。信行は、のちに衆議院議員となり初代衆議院議長、ついで特命全権イタリア公使・貴族院議員・男爵に叙せられ、

写366　中島湘煙時代の俊子

華族に列した。

信行の妻となった俊子は、信行の良き妻としてつとめる一方、新栄女学校（現在の女子学院の前身）やフェリス英和女学校（現在のフェリス女学院）の教壇にこわれて立ちつつ、巌本善治（出石出身）の主宰する『女学雑誌』にさかんに筆を執り、女学思想や女子教育の振興につとめた。

明治二十三年（一八九〇）、信行が神奈川県より第一回衆議院議員選挙に出馬して当選、初代衆議院議長に選ばれるや、政治家夫人として俊子は大いに内助の功を発揮した。明治二十五年（一八九二）、信行がイタリア公使に任じられると、ともにローマに赴いた。その地で病（やまい）を得るに至り、翌年に信行ともども帰国、療養生活に入った。

湘煙（湘烟）・俊子が詩や文章に巧みだったのはよく知られているが、死後二年たって公刊された『湘烟日記』はとくに有名である。だが公刊されたこの日記は、死の直前の二か月ばかりのものである。公（おおやけ）にされなかった部分に、実は明治政界の裏面や、歯に衣きせぬ辛辣な人物評が綴られていて、異彩を放っているのである。だが、晩年になると、日記の随所にみられていた痛烈な皮肉や揶揄は影をひそめ、かわりに一日一日を心豊かに楽しもうとする心境がうつし出されてくる。悪感や発熱・動悸・血痰に襲われながら、心は余裕綽々、日記の筆は死の五日前まで続いた。明治三十四年（一九〇一）五月二十五日死去。享年三七歳であった。墓は、終焉の地となった神奈川県大磯の大運寺にある。法名は葆光院月洲湘烟大姉。辞世の句として次の句がのこされている。

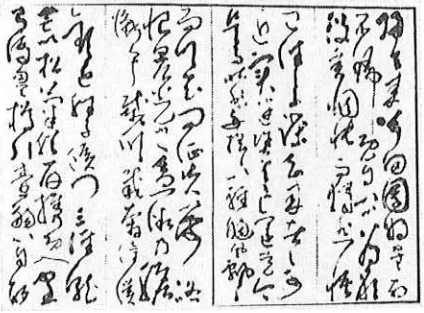
「牡丹見て芍薬を見て吾逝矣（か）」「立がけに母の賜はるむすびかな」「藪入りに鳥渡（ちょうと）そこまでひとりたび」

俊子に形影相伴うようにして深く愛した母タカは、短命だった娘にひきかえ、一〇三歳の長寿を全うし、俊子ののこした書や色紙などの作品を、自分の郷里である豊岡のゆかりの人々に分け与え、長く記念としたという。なお、湘煙・俊子の著作としては、死後二年後に編まれた、前記の『湘烟日記』が有名だが、長らく彼女の著作集は編まれずにすぎた。近年に至り、女権思想家・文学者としての岸田俊子（中島湘煙）の再評価の気運が高まり、『湘煙選集』全四巻（一九八五～一九八六。不二出版）が編まれ、上梓された。

（鈴木裕子手稿より）

表240　岸田俊子の主な著作・伝記

書　　名	発行所	発行年
函入娘・婚姻之不完全	駸々堂	1883
林兄弟報讐記・忠姦雙鑑		
伊呂波外へ席上演説		
善悪の岐	女学雑誌社	1887
湘烟日記	育成会	1903
（湘煙選集１）		
岸田俊子評論集	不二出版	1985
（　〃　２）		
岸田俊子文学集	〃	〃
（　〃　３）		
湘煙日記	〃	1986
（　〃　４）		
岸田俊子研究文献目録	〃	〃
女性解放の先駆者たち	清水書院	1975
中島俊子と福田英子		
花の妹―岸田俊子伝	新潮社	1986



写367　俊子の書「帰去来辞」
平尾道雄氏の著書から

2 民　俗

〈前　注〉

1、時期は、大正期から昭和初期を中心とする。

2、地区は「衣食住」は河谷地区、「年中行事」は八社宮地区、「人の一生」は祥雲寺地区。

3、聞き取りは森垣信重・松岡正枝（河谷）、岡田与一・有田芳夫・有田しか（八社宮）、稲葉長兵衛・稲葉志づ（祥雲寺）の各氏（いずれも明治生まれ）から行なった。

4、聞き取りの時期は、昭和五十八年から六十年にかけてである。

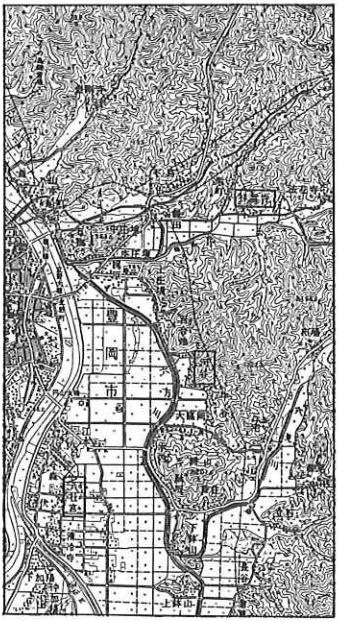


図23　豊岡市円山川東岸部地図
3地区はすべて円山川東に位置し，祥雲寺は旧三江村・河谷は旧新田村・八社宮は旧中筋村に属した。